

平成24年度第1回北区まちづくり協議会全体会 語り部との座談 グループC 佐藤講師

重複した言葉遣いや、明らかな言い直しのあったもの、わかりづらい表現などは、整理した上で作成しています。

佐々木所長（新琴似まちづくりセンター所長）

こちらはCグループになります。私は、司会進行を務めます新琴似まちづくりセンターの佐々木と申します。よろしくお願いいたします。

初めに、こちらのグループでお話をさせていただきます語り部のご紹介をさせていただきます。

ガイドサークル汐風の佐藤かつよさんのプロフィールを簡単にご紹介します。

佐藤さんは、ご自宅が高台にありましたので、津波の被害は免れたということでございます。震災直後から、被災者の受け入れに回られまして、40日間にわたる炊き出しなど、被災者支援に尽力されました。現在も、命の大切さですとか、地域住民のネットワークの重要性を訴え続ける活動を続けていらっしゃるということでございます。

では、出席の方々の自己紹介を1人ずつお願いしたいと思います。

【自己紹介】

佐藤講師

私は、南三陸町の出身なのですがけれども、長いこと南三陸町を離れていまして、戻ったのが今から11年前です。私が11年前に入ってきたときには、地元のことを何も知らなくて、その後、まちの状況を知るために、どんなところでどういうものがあるのかということで、自分の目と足で地区を全部回ってみました。

そんなことがきっかけで、その後に、地域ガイドという養成講座に参加することになり、まちの文化とか歴史を知りました。

そのことが幸いに、今回の震災後のボランティアガイド活動にスムーズに入れたという面もございます。

3.11の津波のときの状況は、私の住まいは高台にあるのですが、午前中は市街地の病院にお薬をいただきに行っていて、12時半ぐらいまで、その場所にいたのです。いつもは、その足で、お友達のところに寄って帰っていたのですが、そのときは、そういう気持ちにならないで、真っ直ぐ家に戻って、家で昼食をとった後に、あの2時46分の揺れです。ですから、住まいは高台で、自宅にいたということが功を奏しました。もし、市街地の病院にいたならば、私も津波に巻き込まれていた可能性は十分にあります。



2時46分の最初の大きな揺れは、長さとして3分ぐらいに感じました。そのときに自分がとった行動は、ドアをあけなくちゃ、これが先でした。玄関に行って、ドアをあけました。1回目の揺れがおさまるまで、外の庭のフェンスにつかまってました。その後、もう一回揺れが来て、また間もなく余震が続いたのです。ですから、2回の地震で、前後6分ぐらいの揺れを感じていました。

揺れがとまったときに、携帯電話が鳴ったのです。そのときは、携帯電話も、テレビも、ライフラインは全部大丈夫だったのです。ライフラインが切れたのは、津波が来たのと同時で、全部のライフラインが切れてしまいました。

南三陸町には防災無線があります。役場の防災庁舎から、防災無線で、最初は6メートルの大きな津波が来るから早く避難してくださいという放送が入りました。そのうち、10メートル以上の大津波が来ますから早く避難してくださいという放送が入りました。私は、それを聞きながら、自分の家の付近は絶対に避難場所になると思いまして、その準備に取りかかりました。

準備の最中に、テレビも防災無線もぶつっと切れてしまったのです。私は、高台の波が見えないところにいましたので、確認はできないのですけれども、ぶつっと切れたときには、既に津波がやってきたと感じました。もう来ちゃったかという感じですね。

自分の家が高台だから、避難所になるだろうと想定して準備していたのですが、私が避難してくるだろうと想定していた方は、結果的にはおいでになりませんでした。でも、どうして来なかったのかという情報の取りようがありません。そのときには、携帯電話もだめでした。携帯の中継所も全部倒れてしまったから、使えない状態でした。ライフラインが全部とまった状態ですから、南三陸町がどうなっているかというのは、県でも情報がつかめないし、もちろん国でも情報がつかめない状態です。当時はそんな状態でした。自分の身内もどんなふうになっているかというのは、お互いにわからない状態でした。

地震から津波までの時間が意外と速かったです。先ほどの話では45分ぐらいとなっていました。私はもっと早く感じました。地震から25分ないし30分ぐらいの時間で防災無線が切れてしまったのです。切れてしまったときには津波が来ていたということ、後で確認できました。非常に時間が短かったということです。

既にテレビなどでご覧いただいていると思うのですが、今日は図面を持ってきました。これが南三陸町の全体の面積です。こちらのブルーのところは海で、湾が深くなっております。この赤く彩られたところが浸水地域です。南三陸町は、三方を山に囲まれておりまして、一方だけが海に面しているところです。その海に面しているところに、全部集落があります。中心街は志津川地区だったのですが、この深く入ったところに津波が、海岸地点から一番奥の3.5キロ地点まで津波がやってきております。



特に、南三陸町は、まちは小さいのですが、1,000メートルを超える川が10本あります。津波がその川を全部さかのぼってきました。あの川を上る津浪を見た方は、新幹線のように速かったというふうに表現しております。というのは、川はさえるものがないですから、一気に来てしまいます。

今回の津波は、高さが十数メートルということで、津波が次から次へと来ていますから、奥に行くに従って高くなっていくのですね。ですから、比較的、海に出ているところよりも、湾の奥深く入ったところの方が津波は高かったのです。

私たちがこの津波からしっかり学んだことは、自然を侮ってはいけないということです。今までは、ここまで来なかったから大丈夫と油断した方は、ほとんど家が流され、命も落とされておりまして。今までの経験は何の役にも立たなかったのが今回の震災です。

私たちのまちは、地盤が固いけれども、津波には弱いと昔から言われてきたところなんです。そういうこともありまして、津波は何回も経験しております。近いところでは、明治29年の三陸大津波です。このときも、何百名という方が亡くなっています。その後、昭和8年に大津波がありました。そして、昭和35年には、地球の裏側から津波がやってきました。チリ地震津波でございます。そのときの津波の高さは、4メートルを超えています。地球の全く裏側から、24時間かかって津波がやってきました。

その当時は、今のように衛星が飛んでいるわけではないですから、全く情報が入らない中で、津波が突然やってきたという状況でした。それは朝方だったのですけれども、志津川地区だけでも41名が命を落としております。そのときに4メートルぐらいの高さの波が来ていますから、2階建ての家の1階は全部浸水している状況ですね。

その津波を想定して防災庁舎もつくられていたのですけれども、今回の1,000年に一度という大きな津波には、自然を侮ってはいけないということを知られました。

私は家にいたものですから、家が流されていない分、その後、どんなふうに活動したかということをお話したいと思っております。

高台にベイサイドアリーナという体育館がありまして、そこが避難所になりました。その近くの団地に私の家がありましたから、避難してきた方のために、早速、地域の人たちが、全部集まってきて、炊き出しを始めました。最初は、集会所にお米とかみそなどは備蓄しておりませんから、各家々から自分たちで、お米を持ってくる人、あるいはみそを持ってくる人、ネギを持ってくる人ということで、自分の家にあるものを持ち寄って炊き出しを始めました。

そのうちに、南三陸町の中で、比較的被害の少なかった山側の地区、ここは、橋が落ちたり、地割れしたりということで、道路が寸断された状態だったのですが、ここから、山道を越えてお米を持ってきてくれました。それで、炊き出しがたくさんできるようになったのです。私たちの地域では、1日1,200個ぐらいのおにぎりを、それこそ朝から晩までつくりました。

3月11日は、まだ雪が降っておりました。暖をとるにも、集会所にストーブが1個あっただけで、そのほかのものはなかったのです。電気も全部だめですから、外で、たき火をしながら暖をとったというのがそのときの状況です。

私たちは、今、文明の力で、非常に暮らしやすく、便利な生活になじんでいると思

いますし、恐らく、皆様方もそういう生活をされていると思います。自然災害に対しては、文明の力はなすすべがないということも味わいました。電気が途絶えてから復旧するまで、一番早くて35日かかったのです。水道は3カ月半かかりました。

水道がないということは、飲み水がありません。各家で、それぞれが2リットル入りのペットボトルで6本とか12本とか持っていたと思うのですがけれども、いざというときに、そんなものは何の役にも立ちません。飲む程度で、ほかのことをするときには、とてもではないけれども、そんなものでは足りないということがわかりました。

私たちのまちには、近隣の市町村から給水車が来ましたので、飲み水とか、煮炊きをする水は間に合いましたが、例えば、炊き出しの洗い物や、野菜を洗うにしても、水を使います。その水の使い方はこんなふうになりました。大きな鉢に水を入れて、野菜を洗うときに、一回洗って捨てるということはとてもできませんでした。幾つかあって、何回も洗うものは、土だけはここで落とそうとか、その次は、もう少しきれいにやってというふうなやり方をしたのです。1回ずつ捨てる、水が足りないわけです。炊き出しのときの水使いを工夫しました。

そして、炊き出しのときに必要なものとして、電気が使えないということで、ここで力を発揮したのはプロパンガスです。これが非常に功を奏しました。ご飯を炊くにも、ほかの煮炊きをするのも、プロパンガスが役に立ちました。

私たちの集会所では、ご飯を炊くのに、ガス釜を用意していたのですね。もし電気がないときは何もできないから、ガス釜にしようということで、それが功を奏しまして、おにぎりづくりには、それで何回も炊いてはおにぎりづくり、また炊いてはおにぎりづくりということを繰り返しやりました。

それから、暖をとるという意味で大切なのは、今はボタンを押せばファンヒーターがついたり、電気ストーブがついたりということですが、電気が35日も来ない間に、私たちは、一番大切な部分として、アナログタイプの灯油ストーブが役に立ちました。ボタン一つでつける方ではなくて、マッチをすって火をつける方です。

私は、オール電化の生活をしていましたから、全部使えなかったのです。今は、アナログタイプのストーブを用意しています。震災後、購入いたしました。

それから、震災のときに、もう一つ、個人として役に立ったのは、ご家庭で使っている卓上用のガスボンベの小さいコンロです。電気が使えないということで、そういうものが役に立ちました。

あとは、七輪と炭です。こういうものもあった方が、震災のときには役に立ちます。文化的なものだけに頼っていたのでは、いざというときに非常にしっぺ返しを食うということ、今回の震災から学びました。

今度は水ですけれども、水洗トイレは、水道がとまるとストップしてしまいます。電気がとまってもストップしてしまいます。そこで、私たちは、おふろの水を使った後に、翌日、新しい水にかえるまで捨てないでおくことが大切だなということがわかりました。それがトイレに転用できるということです。でも、水道の復旧が3カ月半かかったわけですから、その間、水洗トイレをどうしたかということになりますが、地域の人たちが軽トラックに大きなタンクを用意して、川のそばに行って、そのタンクにくんでくるわけです。それを各家々のおふろの浴槽に入れてくれたわけです。それは、あくまでも、トイレ用のものです。川からくんでいきますので、飲めるわけでは

ありません。そんなふうにしてトイレを使いました。2日や3日ぐらいの場合は、お風呂の水でも何とかなるのですが、それが1カ月、2カ月となりますと、とても間に合いませんから、地域の方で、軽トラックを持っている人はそれを提供してくれたり、自分の家でこういうものがあるというときには、みんな持ち寄りです。

皆さん方から質問があった中で、備蓄品という話が出ていました。実際に、私たちのまちでは、地域ごとで自主的に防災組織がつくられていました。しかし、組織があっても、組織の中の備蓄という部分が徹底してあったわけではありません。組織はあったけれども、組織が活性化していたかということ、そうではなかったのです。ただし、まち全体の防災訓練を毎年5月24日にしていました。それは、いわゆる海の近くの人です。私たちは高台だったので、防災訓練は、津波に対する防災訓練ではなくて、例えば、火事が起きたときに類焼させないための防災訓練ということでやっておりました。津波に対する心構えが、高いところに住んでいる者は余り意識していなかったのです。しかし、高台に住んでいる人がいつもそこにいるかということ、そういうわけではないのです。仕事で出て行ったりして、高台にいない場合があります。そんな中で、住居は高いところにあっても、仕事の関連で命を落とされた方は、私たちの地区の中にもいらっしゃいます。例えば、学校の先生や役場の職員の方が犠牲になっております。

地震、津波というのは、いついつあるという予告はありません。いざというときに一番何が大切かということ、まず、低いところにいたならば、海岸から離れて高台に逃げることが一番です。逃げるのも、時間との闘いになります。地震が来て津波が来るまで、悠々と過ごせません。そして、一度逃げたら、あれを忘れたから戻るということは絶対にしないということです。それをやって亡くなった方が多うございます。

それから、逃げるときに、車で逃げて、道が渋滞して、そのまま津波に巻き込まれてしまったという方も多うございます。

南三陸町の場合は、小学生とか中学生とか高校生の子どもたちは、非常に幸いしました。時間的にも、まだ学校から帰宅していない時間帯ですから、子どもたちはみんな学校にとどまっておりました。学校の先生たちも、地震があったときに、帰宅させないで、学校にとどめておりました。その子たちは皆助かっています。たまたまお母さんが迎えに来てしまったというときに、せっかく迎えに来たのだから帰さなくてはいけなかなという葛藤があったと思うのです。でも、連れて帰りたいと言われれば、いや、だめですと言えない、そんな言い合いをしていたら、ほかの子どもも心配します。ですから、中には帰した子もいたかもしれませぬ。そして、帰した子が犠牲になっているケースもあります。学校にとどまった子どもたちは、全員、無事でした。

もう一つ、こういうケースがあります。

戸倉地区というところの小学校は、住宅街の一角にあるのです。3.11の前の3月9日に、マグニチュード7クラスの地震がありました。それを受けまして、その小学校では、いざというときの避難路をもう一度確認しようということで、先生方が3月10日に、どこにしようかという話し合いをまずされたそうです。そのときに、小学校の3階の屋上あるいは高台にという二つの話に分かれたそうです。分かれても、もし小学校の3階だったならば、水が来たら、周りが水で孤立してしまうので、やっ

ぱり高台がいいのではないかということで、高台に逃げたのが幸いしまして、全員助かっております。

3月9日に地震があって、それを踏まえて10日に避難路を確認した訓練をして、まさか次の日に津波が来るだろうと思っていなかったのですが、その翌日の3月11日にあの津波がやってきました。前の日に訓練をしていましたから、子どもたちは全員高台に逃げて助かっています。

中学校は、ほとんど高台で、戸倉中学校も高台でした。ところが、海拔20メートル近くある高台に水が来てしまったのです。1階に水が来て、すぐ近くに裏山があって、裏山に逃げたので、子どもたちは無事でした。ただし、そのときに、ちょっと足の遅い子がありまして、その子は残念ながら水にのまれてしまいまして、それを助けようとした先生も亡くなってしまうというケースがありました。ほかの子どもたちは助かりました。

そんなふうに、津波の場合は、時間との闘いも大きな別れ目になるということを私たちは学びました。いち早く高台に逃げて、逃げたら絶対に戻らないということです。大事なものを忘れたとか、保険証を持ってこなかったから取りに行かなくちゃというふうに戻っている時間はないのです。時速90キロぐらいの速さで津波がやってくるというのが後で測定されています。自分たちが一生懸命駆けても間に合いません。ひざまで来たときには、足が流されてしまいます。そういう実験を大学の方でしているようです。

ですから、とにかく高いところにいち早く逃げる、どこに行っても、海がどちらかとわかったときには、海の反対側の高いところに逃げる、これが一番です。

この写真は、市街地の道路以外に家が建っていたところです。この辺は、海から1キロぐらいあると思います。それが、津波によって、こんなふうにまちが消えてしまいました。道路がくっきり出ていますが、道路の上も全部瓦れき状態だったのです。これは、瓦れきが随分撤去された状態の写真です。道路さえもわからない状態になりました。一般住宅ですから、木造住宅が多いです。この中に商店街もあつたりしたのですが、津波が来たときに、こんなに木造の家が粉々になってしまうのだということがわかりました。津波の力がそれだけ強いのです。本当に悔ってはいけません。

これは、津波前は人工の海水浴場だったのです。それが、津波後にこんなふうになってしまいました。見る影もなく、海水浴ができるような状態ではなくなってしまいました。

この部分には公園がありました。そして、その道路を利用して、夏祭りのよさこいなどもやっていたわけですが、こんな状況です。このSLは公園前にあったのですが、それが道路に横倒しになりました。まちが一遍に何もなくなってしまいました。

志津川地区というのは、まちの中心街に3本の川があるのです。この3本の川から水があふれ出てきてまして、中心街で、皆さん方がテレビで何回かお聞きになった防災庁舎のあたりで、15、6メートルぐらいの波が来ました。防災庁舎は12メートルでした。屋上に50名ぐらいの人が避難していたのですけれども、水が引いたときにはほんの12、3名しか残っていませんでした。

多くの皆さんは、学校の体育館に避難されていましたが、自分たちの情報が全然わ

からないわけです。何も入ってきません。

これは、震災から1週間以上たってから初めて新聞を見ている状態の写真です。自分のところがどうなっているかというのは、新聞で初めて知る状態です。

そして、この写真は、体育館でじっとしていると、体力も衰えてきますので、体力が落ちるということは免疫力が落ちてきますから、風邪を引きますと一気に広まります。そういうことも考えまして、皆さんで少しでも体力を保とうということで、毎日、午前中、午後と時間を決めて、みんなで運動し合っているところです。

体育館での避難生活は、震災から2カ月ぐらいでした。いつまでも学校を占拠しておりますと、子どもたちの授業が遅れてしまいます。そういうことで、5月には、第2避難所に移ることになりました。第2避難所というのは、町内にはございません。隣の市です。例えば、登米市とか栗原市とか大崎市とか、そういう内陸の市ですが、公共の施設をおかりいたしまして、第2避難所での生活が5月から8月まで続きました。

これが、第1避難所から第2避難所に移るときの写真です。それぞれバスで移動いたしました。避難所で顔見知りやとできたのに、またお別れしなければいけないというときの写真です。

そして、第2避難所での生活を終えて、まちに仮設住宅ができて戻ってきたのは8月でございます。南三陸町は、平場のところが全部浸水していますから、仮設住宅を建てる場所はすべて高台ということで、非常に困ったのです。山を崩すとか、あるいは、個人の土地である高いところを借りるというふうな感じで、そうすると、学校の校庭に仮設住宅を建てないと、建てる場所がないのです。ですから、今は、ほとんどの学校の校庭の端の方を使いまして仮設住宅ができております。それでも足りなくて、分散させた状態で、58カ所に仮設住宅を建てております。そこに約2,200戸の仮設住宅ができておまして、今はそこで生活をしているわけです。

仮設住宅の生活も、国の指定では2年と言われているのですがけれども、先ほど見ていただいた状態のところには住まいは建ちません。全部が高台移転になります。これまでの計画で、全部の川に6メートルぐらいの高さの水門ができていたのですが、水門も役に立ちませんでした。その水門は、毎月、遠隔操作で上げ下げの訓練までしていましたが、それも今回の津波では役に立ちませんでした。そういうこともありまして、これからは水門はつくらないと。そのかわり、川に沿った状態の防潮堤を少し高くつくろうというのが今の計画になっています。でも、町民は、そんなに高い防潮堤は要らないと言っているのです。海が見えなければ、変な高いものをつくったって意味がないと。

岩手県の場合ですと、十何メートルの防潮堤を全部越えてきていますね。だから、大きい津波であればそれを越えて来るから、それほど高い防潮堤は要らないというのが地元の人の声です。

国とか県では、8メートルぐらいの防潮堤をつくるという計画がありますけれども、地元に住む町民にとっては、それほどの高さは要らないと思っています。むしろ、海が見えていた方が、油断しないで高台に逃げられるということを言っております。これから、この防潮堤がどのぐらいになるのか、最終的にはわかりませんが、現在の計画では、そのようなことを聞いております。

札幌の皆さんの場合は、海から遠いですから津波の経験はほとんどないですよ。でも大きな川がありますね。そうしますと、海から来なくとも、山に降った水があふれることも考えられますね。そんなときも、油断してはいけません。早目にお逃げになった方がいいです。

私たちは、昔から言われていた言葉ですが、命てんでんことというものがあります。自分の命は自分で守るということです。それはどういうことかということ、家族の中、職場の中、あるいは町内会などで、有事のときに、どうやったら命が助かるかということ、それをそれぞれが話し合っておかれると、まず自分の命があって人の命も助けられるわけですから、自分の命は自分で守るということを、いろいろな場所で、それぞれが話し合いをなさっておかれた方が、動きやすいのです。その話し合いがないと、どうしよう、どうしようということで時間がたってしまいます。こういうときにはこういうところに逃げようねと、それぞれのエリアで、最小単位は家族で、話し合いをしておくということです。子どもたちが学校に行っているときは、先生の言うことをよく聞いて、一番いいというところに逃げなさいということ、家族の中で話し合う。家族は家族で、こういうときにはこういうところにいるからねということ、をしておくということです。そんな話し合いを常にされていた方が、有事のときには功を奏します。話し合いをしていないと、想定外のものが来ると、どうしたらいいのかという部分でむだな時間を費やしてしまいますから、町内会なり、いろいろな団体の中で、話し合いの機会を何回も持って、有事の際には自分の命を守り、各自が助かれば、結果的に全員助かるということにつながっていきます。この点はぜひ話し合いをされておかれた方がいいということ、を今回の震災から学びました。

佐々木所長

佐藤さん、ありがとうございました。

皆さんから、もう少しこんなことを聞いてみたいということがございましたらお願いします。

会員

今のお話を聞きながら、率直な感想です。

僕は、1年経った今年の4月に、たまたま福島から札幌に避難されているおばあちゃんから震災の話をお聞かせしてもらったのですけれども、ものすごい状態だったということも聞きましたし、お金は人の命を救ってくれないという話がすごく印象に残りました。

強欲な人で、金庫を離さない人が、震災のときに金庫を抱えて死んでいた、そんなことを聞きました。今のお話のすぐに逃げろということがその話と重なりまして、もっともだなと思います。

もう一つは、北海道も南西沖地震があったのですけれども、1年後ぐらいに奥尻島に魚釣りに行ったら、1年たっても電信柱の上に海藻がべったりへばりついていました。電信柱は十何メートルぐらいでしょう。あの3倍ぐらいの高さの津波が来ているのだから、あんなところの高台では、とてもじゃないけれども、助からなかったのだらうなと思いました。

それから、青苗の港の周りが、先ほど言われたように、防潮堤をつくっているもの
ですから、島全体が要塞のように見えるのですね。それまで観光で売っていたところ
が、要塞になっていて、何のおもしろみもないのです。

佐藤講師

奥尻島のその後のまちづくりを私どもは聞いております。だから、そうはしたくな
いという気持ちがあるのです。

会員

先ほどの、防潮堤を川のそばにつくりたくないというのは、それなのかなと思いな
がら聞いていました。

佐藤講師

今度は、住まいが平地から高台移転で、山を崩した状態のところにも全部移るのです。
だから、なおさら高い防潮堤は要らないのです。

会員

電気はいつごろ通じたのですか。

佐藤講師

電気は、一番早くて35日かかりました。津波で電信柱も全部倒された状態ですか
ら、その電信柱を立てるところから始まっているわけです。もっとかかっているところ
、奥まったところなどは、それから2カ月後とか、それくらいかかっています。

会員

地震があったときに、ご自分のお宅の中はどんな感じだったのですか。

一回とまり、それからもう一回ありましたね。2回目があったときに、自分の家の
家財道具などはどうでしたか。

佐藤講師

私の場合は、食器棚などは、全部、L字金具で自分でとめていました。たんすは、
前のところに敷くのが売っていますね。あれをつけていました。ですから、倒れるも
のは何もなかったです。ただ、食器棚は倒れないのですが、観音開きの食器棚がちょ
っと開いてしまって、その中のワイングラスが、頭が重いので、それが揺れたときに
滑り落ちてしまって割れただけです。

会員

あれは効果があるのですね。

佐藤講師

ありますね。もし、それがなかったら、新聞紙をこれぐらいの幅に折って、それを

たんすの前の方に置くだけでも全然違います。

会員

ご自分のところの震度は、どのくらいだったのですか。

佐藤講師

震度6弱です。むしろ、内陸の方が震度7くらいあったのです。登米市とか栗原の方は震度7くらいでした。

海岸沿いなのですけれども、このあたりは岩盤なのです。内陸の方は、水道管がずれたということで修理があったそうです。南三陸町は、そういう修理がほとんどないということでした。

そんなふうに、土地、土地の特徴がありまして、岩盤でできているために震度6弱で済んだのです。ですから、地震で全壊した家はないのです。全部が津波です。むしろ、内陸は、地震で半壊とか全壊というのがありました。そういう状況です。

会員

去年の9月に避難所の訓練をやったのです。生々しいところで、町民は非常に関心があって、参加者も非常に多かったです。防災組織があるのですけれども、防災のリーダーが避難所に行ってまずやることは、ライフラインのチェックとか、けが人がいないかとか、それはやったのですが、名簿を書かせるのに非常に手間取りました。先ほどおっしゃっていましたが身内の安否についてですが、我々の訓練では、身内の安否の不安ということを全く想像していなかったのです。訓練にはないのです。

佐藤講師

確かに、今、名簿をつくるということに関して、学校でも絶対に外へ出さないということを言われていますね。それぞれの地区の町内会の名簿をつくることさえ非常に難しいです。個人情報保護法という部分です。

しかし、私たちのところでは、婦人防火クラブのメンバーが、いざというときに名前がわからなくて、どうやって確認できるのだと、区長(地区の長)に食いつきました。それを受けまして、名前と住所だけですけれども、一つの行政区単位でつくっておかないと、チェックできないのです。誰がいて、誰がいないのか、誰がけがしたのかもチェックできません。

やっぱり、名簿がないと困ります。そのことは、町内会で、こういうわけだから、こういうものとして使うのだからという了解のもとでおつくりになった方がいいと思います。

会員

先ほどの質問に関連するのですが、佐藤さんの地域に、いろいろなところから避難されてきますね。ですから、町内会も違うし、そういうところで、一番先にリーダーシップをとられた方はどなたなのですか。

佐藤講師

とてもいい質問をいただきました。

こういうときに、本当にリーダーになるべく人がいるわけですが、その人の裁量によって随分違います。同じ役目を受けている方で、リーダーシップが非常にとられているところは全部まとまっていきました。ところが、リーダーシップをとらないところは、はっきり言いまして、ぐちゃぐちゃです。

そこで私たちが学んだのは、リーダーを選んだのは自分たちの責任でもあるのだから、ただなおざりに選ぶのではなくて、本当に行動をとってもらえるような人をリーダーにしなくてはいけないということです。そして、今回の3月の総会のときに、そういう人を地域で選びました。

佐々木所長

それは、町内会ということですか。

佐藤講師

行政区です。

会員

私も町内会長をやっているのですが、自分の町内会の人には助けるよ、よその町内会の人には助けないよというわけにもいきませんし、町内会に未加入の人を知らん顔もできないし、結局は避難された方は同じように受け入れて、助け合わなければいけないのだなと思います。

佐藤講師

町内会以外の方がどんどん避難してきますから、その方たちが何名いらっしゃるのか、そのうち、大人が何名で、子どもが何名かということを書いてもらいました。その人数を含めて、炊き出しもやりました。

会員

行政の手助けというのは、災害があってから2日後、3日後ですか。

佐藤講師

行政からの手助けは全然ありませんでした。役場自体が流されていますから。役場で最初にやったのは、避難所に、三々五々、来た人たちに名前を書いてもらうところからです。名簿も何も全部流されていますから、そこから始まったのです。

ですから、最初は、1万名くらいの方の行方がわからないと報道に出たのですが、調べようがないのです。人数の把握については、完全に把握するまでは何カ月もかかっていると思います。

私たちは、高台ですから、一度、名簿をつくったあとは、例えば、行政区長にしる、公民館長にしる、次の方に役職を譲るときは、当然そういう名簿を引き継ぐ。新しく入った方などに対しては、説明をきちんとするというやり方をした方がいいなという

ことを学びました。

会員

あれから1年半たちまして、行政の姿勢はかなり変わりましたか。

佐藤講師

行政は、何しろ39名の職員が命を落としています。そして、リーダー格の人たちが命を落としています。行政に勤めている公務員の方たちは、町民のために働くということが大きな使命としてありますね。ですから、最後の最後まで自分の仕事を全うされて命を落としたと思います。

そういう状況の中で、行政は、全部流されていますから、一からのスタートです。今は、復興のために、例えばお金を国からいただくためには、計画を立てて、その計画を実施するためにどれぐらいの費用が必要かという書類を作成することがすごく大変なのですね。それで、てんやわんやだと思います。

会員

国の復興予算の何割も使っていないし、まだまだ使い道がわからないのか、どういうふうに使っていいかわからない部分があると思います。だから、復興予算がかなり使われていないということもありますね。

佐藤講師

今、南三陸町は、全国から、行政に対する支援ということをお願いして、行政の経験がある方を各自治体から派遣していただいて、補っていただいています。新しい人を入れても何もできませんから、行政になれている方を各自治体をお願いして派遣していただいて、進めております。

会員

私は、日赤の仕事をさせていただいているのですが、報道関係で、義援金が届かないとか、行政の方が何もしないということが盛んに報道されていきました。マスコミの報道では、ひどいなと感じた方が結構多いと思うのです。例えば、義援金を行政に渡しても、それこそ住民票も戸籍も流されているので、義援金を被災者に渡すのに時間がかかりますね。でも、マスコミでは、義援金が行かない、また、被災者の方ももらっていないということで報道されていきました。そのときに被害に遭われた被災者は、行政に対してどのような気持ちでいたのかと思います。

佐藤講師

マスコミと言っても、いろいろな差があるのです。それも今回学びました。マスコミの中でも、新聞とか、電波を利用するテレビ局とかいろいろありますけれども、それぞれいろいろなタイプのたたき方をしているのです。例えば、個人で現地に入って取材したものを大きな新聞社に売ってという報道関係者もあります。

私どもの町では、義援金をほかの被災地よりも早く渡しました。また、南三陸町は、

個人献金みたいなものも、件数として、ほかの被災地より多くいただいております。被災された方に必要なものは、いち早く、全部配っています。

そういうふうに報道されるというのは、個人レベルの情報を上げていると思うのです。同じ被災者にも、いろいろなお考えの方がいらっしゃいます。その中で、随分偏った言い方をする人もいます。そういう声を拾って報道したケースもあるのではないかと思います。

会員

地域の方は、行政に対して無理難題を申し上げていないということは当然わかります。ですから、自分たちで炊き出しをしているわけですね。

佐藤講師

商店街の人たちが自主的にリーダーとなり、学校や中学校で炊き出しをしていました。

会員

札幌は、冬の厳しいまちですから、もし札幌で冬にこういった災害が起きた場合は、恐らく半分から3分の2は凍死するであろうと言われております。

そのところで、今年の冬はどういう過ごし方をされたのか、対策を講じられたのかということをお聞かせいただければと思います。

佐藤講師

家が流されていない方は、まず心配なかったのです。仮設での生活をされている方の場合、例えば、断熱材が仮設に使われていなくて寒く、急遽、断熱材を入れる工事をしたとか、お風呂にお湯だき機能がなくて、1回お湯を入れると、冷めて、何人も入るころには随分冷めてしまうという話がありました。お湯だき機能の工事は今年、冬になる前に工事を始めます。断熱材は、昨年度中に全部入れてあります。そういうふうにやっています。

佐々木所長

ありがとうございます。

最後に、講師の佐藤さんに、もう一度、お礼を申し上げたいと思います。

どうもありがとうございました。